

2025年4月6日 第二礼拝

説教題「なお道を進まれる主のあとを」マルコによる福音書10章46～52節

主任牧師 加藤 誠

「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」(マルコ10:52)

今年の受難節は、主イエスがなぜ十字架にかからなければならなかったのか。その理由を各人が自分の言葉で語れるようになりたい…という願いをもってマルコ福音書を読み進めています。主イエスのご自分の十字架への道を弟子たちに再三語りますが、彼らは理解できずにトンチンカンな姿をさらしている姿を先週も学びました。そこにはいくつかの理由が想像されます。一つは「神の子である主イエスがそんな死に方をするようなことはあってはならない!」「神と一緒にんだからそんなことあるわけない!」という「神の子と十字架の受難を結びつける難しさ」があるのではないかと。「神の子には栄光がふさわしい」からです。人々の間で力強い奇跡を見せて、間違っている連中をギャフンと言わせて正しい道に立ち帰らせ、神の前にひれ伏させる。「そのような力強い栄光こそが神の子にふさわしい!」と弟子たちは考えていたのでしょう。

もう一つは、その主イエスに従うことで「自分も栄光にあずかりたい」という願いがあったからではないか。主イエスに従った自分も人々から「よくやった!」と称賛を得たい。それなのに主イエスが十字架で殺されたなら、これまでの努力も犠牲もすべて水の泡。家族にも友人たちにも示しがつかない。「何としても自分も栄光にあずかりたい」という強い願いが彼らの心の内にあったことだろうと思うのです。

このどちらもが私たちの中にもある思いでしょう。弟子たちだけ無理解でトンチンカンドとは言えない。「神の子には栄光がふさわしい」と思い、「できるなら自分も栄光にあずかりたい」という思いを抱えている私たちには、十字架に向かわれる主イエスの道はなかなか理解できない。が、そのような私たちの心に風穴を開け、十字架に向けて窓を開けてくれるのが今朝の盲人バルティマイのお話です。

主イエスたちがエリコの町を出ようとした時、道端で物乞いをしていたであろう一人の盲人が「ダビデの子イエスよ!」と叫びます。人々が黙らせようとしても叫び続ける男の前に主イエスは立ち止まり、彼の願いどおりその目を見えるようにしてくださったのですが、ここで注目したいのは、「何をしてほしいのか」との問いかけに「目が見えるようになりだいのです」と答えたバルティマイを、主イエスが「あなたの信仰があなたを救った」と喜ばれている点です。この「何をしてほしいのか」という問いは、直前で弟子のヤコブとヨハネに向けた問いとまったく同じです。「あなたが栄光を受けられるとき、一人を右に一人を左に置いてください」と答えた二人を、主イエスは「あなたたちは自分が何を願っているのかわかっていない」と厳しく戒められ

ましたが、一方で「目が見えるように…」と答えたバルティマイは喜ばれている。一見どちらも「お願いごとの祈り」に見えるのですが、どこがどう違うのでしょうか。

ヒントはバルティマイのこの後の行動にあるように思います。主イエスに「行きなさい」と言われた彼は自分の家に帰っても良かったのに、エルサレムに向かう主イエスのあとに従います。そして彼はエルサレムでの神の子の受難の一部始終を自分の目で見ることになった。ここに主イエスがバルティマイの目を開けてくださった理由が示されているのではないのでしょうか。つまり彼は十字架の主を見届け、その証人となるために目を開けていただいたのです。福音書の奇跡で名が記されている人はごくまれであり、わざわざバルティマイの名が記されているのは、彼が初代教会において十字架の主の証人として良く知られた人になったであろうことが十分推測されます。

ここに主イエスが弟子たちに求められた「祈り」が示されていると思うのです。自分たちがどれだけ主イエスのために頑張ってささげ、身を粉にして働いて来たか。「自分たちの頑張りを評価してください！」という祈りではなく、「私たちの目を開けて、十字架に向かって歩まれるあなたの後に従う信仰を与えてください」という祈り。この「祈り」を主イエスは弟子たちに求められたのです。同じお願いごとのようで、最終的に神の御名をほめたたることにつながる願いを主イエスは喜ばれたのでした。

もう一つ注目すべきは、バルティマイが最初人々から厳しく叱られている点です。それは少し前に主イエスのもとに連れてこられた子どもたちと同じであることにハッとさせられます。弟子たちは子どもたちとバルティマイを叱りつけた。なぜか。弟子たちには小さな子どもも盲人も「主イエスの働きの役には立たない、手を煩わすだけの存在」に見えたからでしょう。自分たちは頑張っている。でもこいつらは手を煩わすだけ。明らかに「上から目線」です。その「上から目線」を主イエスはひっくり返された。「神の国は、子どもたちやバルティマイのように、何の働きもできていないように見える者たちが温かく迎え入れられ喜ばれる交わりだ。自分たちは神の愛と赦しのゆえにここに居ると身に染みて知っている者たちの賛美が溢れている場所だ。その反対に『自分はやっている』と自分を上に置く者はそのプライドゆえに神の国を喜べない。賛美できない。他人と比較し合い、不満や文句ばかりが口からでる。しかし『自分はやっている』という信仰は最終的には十字架を前に一瞬で崩れ、『実は何もできない無様な自分』を思い知らされる。だから、この目でいつも十字架の主を仰ぎ、『神の愛と赦しだけを見つめる信仰を与えてください』と祈っていきなさい」と。十字架は、私たちが心低くされ、神の愛と赦しだけに立つための土台なのです。

主イエスが求められる信仰は「私たちの一歩前を十字架に向かって進まれる主に従う信仰」であり、日々「その主イエスを見失うことがないように、目が見えるようにしてください」と祈る信仰です。受難節のこの時、この信仰を求めていきましょう。